

## 第4期評価：学習成果を基軸に備えた内部質保証 —その基盤を支える学生支援について考える— ここから見えてきた認証評価における「効果的な伴奏者」とは

島袋香子

北里大学学長

### 1. はじめに

2023年度の認証評価が終わり、評価結果が公表された。機関別評価において多くの大学は「適合」となり、胸をなで下ろしていることと思う。受審終了大学は、今後指摘事項に対する改善に向けて動いて行くと思うが、その本音は、「しばらく休みたい」ではないだろうか。「評価疲れ」と表現されるように、認証評価の受審は、大学教職員にとってエネルギーが取られる仕事である。この状況を改善すべく第4期には弾力的処置が取られるが、第3期において適合の判定を受けていることに加え、「ア」基準2「内部質保証」に関し、是正勧告及び改善課題のいずれも提言されていない。イ) 基準4「教育課程・学習成果」に関し、是正勧告が提言されていない。ウ) 基準4「教育課程・学習成果」の学習成果の測定に関しては改善課題も付されていない。」といった要件を満たしたうえで、「エ) 弾力的措置の対象確認の時点で、前回の機関別認証評価以降に自己点検・評価を実施し、結果を公表している」大学においては、評価項目や評価手法を簡素化することを可能としている。弾力的処置は、大学の創意工夫を促すことと、負担軽減を目的としているが、第4期には、新たな評価項目も加わるため、開始してみなければその効果はわからず、「楽になると、期待して良いのですよね。」と言うのが、率直な感想である。

ところで、第4期の認証評価では「学習成果を基軸に据えた内部質保証」を目指すとし、シラバスの整備に代表される教育システムだけでなく、学生の学習進捗の把握や学習の理解度、達成度の確認等、学習管理

の側面の充実についても大学に求める方向性が示されている。

しかし、学生達は成長過程における様々な課題を抱えており、新型コロナウイルス流行(コロナ禍と略す)の中で過ごした影響から心の問題が大きく、大学教員は、学習成果の達成以前に学生が学習に向き合うための教育支援に多くの時間を費やしている。認証評価においては、教員が努力している状況が評価されるものと理解しているが、評価指標に何を求められるのかは、気になるところである。第4期の認証評価に大きく影響する学生の心の問題への対応について自大学を例に、考えてみたい。

### 2. 最近話題になっている学生の特性と教職員の対応

コロナ禍で対人交流が制限されたことから、学生のコミュニケーション力の不足が取り上げられている。コロナ禍で卒業を迎えた学生には、助けを求めることを怖れず、勇気を持って人と向き合うよう激励して送り出したが、入学した学生にも同じことが言え、成長過程にある学生を社会に出るまでにどう育てるかが課題になる。Z世代と言われている学生達の特性として、SNSによる影響があり、①常に繋がっていることで心理的緊張状態にあること、②スマートフォンを使って自分で調べられるので相談しないことがあげられ、③SNSの脳への影響も取り沙汰されている。実際、心の問題を持つ学生は増加している。本学では、健康管理センターがコロナ対応に奮闘し、健康管理センター内にある学生相談室が、心の問題を持つ学生を

オンラインでフォローしていた。コロナが落ち着くと、学生相談室の来室者が増加傾向となり、2022年度の来室者は、過去最大数となった。コロナ禍において自分のペースで過ごしていた環境から、大学に出てこなければならない環境変化も要因となっているようだ。この状況を見ると、昨今の通信大学人気の理由も頷ける。

各学部における学生対応は、クラス主任（助教～准教授）が主に行い、保護者への対応は学年主任（教授）が行っている。教員は、丁寧に学生に関わっており、学生の悩みは、ここで対応できる内容がほとんどだが、学生対応に教員の授業準備や研究時間が割かれている。また、直接学生相談室を選択する学生もおり、この数が増えると学生相談室の機能に影響が出る。一方で、教員の対応への不安から、学生相談室が抱え込む事例もある。大学としてはどちらも解決しなければならない課題である。

### 3. 学生相談室と各学部の連携

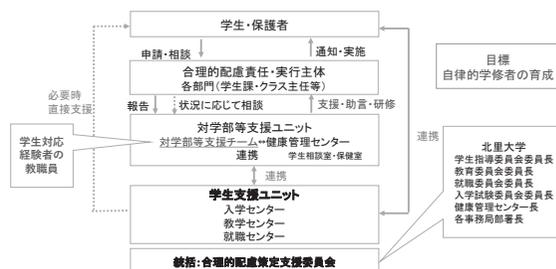
学生相談に対しては、学生支援の三層モデルが提示されており、第1層における日常的な学生支援は、教科担当教員や研究室、事務室による支援、第2層における制度化された学生支援は、クラス主任や学年主任、学生指導委員会による支援、第3層における専門的な学生支援は、学生相談室による支援が提示されている〔図1〕。本学もこのモデルに従って対応している。

学部の教員は入職1年目と6年目に人事部（ハラスメント予防と対応を担当）と高等教育開発センター（入職1年目教員への教育支援を担当）が共同主催する研修会への参加が義務づけられており、ハラスメント予防を含め、学生対応について研修を受ける。しかし、学生相談の実践訓練までには至らず、実際は、経験をとおして対応能力を身に付ける状況であり、学生への対応で心理的緊張状況が続くと、疲弊していく。明らかにメンタルヘルスに問題のある学生に対しては、早い段階から学生相談室に依頼がされるが、学生が学習を進めて行くためには学部との協働が必要であり、クラス主任や担当職員は調整に追われる。学生が直接学生相談室に行くと、個人情報保護の問題から、学生の許

図1 学生支援の3階層モデル



図2 北里大学障害のある学生に対する修学支援の組織体制



可が得られないと学部で情報提供ができず、学部が情報を得られない状況が起きることもある。また、学生相談室が学部で協働を求める場合、学生対応のノウハウを身に付けたベテラン教職員の退職や部署移動がおこると、残された記録からだけでは詳細がつかめず、学生相談室との協働が進まない状況も起きる。

これまでは、各学部と学生相談室の努力で対応していたが、学生の心の問題の増加や障害のある学生への合理的配慮の問題が浮上り、全学的な対応システムを検討することが必要になってきた。そこで、2024年度より、「障害のある学生に対する修学支援の組織体制」を整備し、全学的に対応することにした〔図2〕。特徴は、障害のある学生へ対応経験のある教職員で構成された支援チームと学生相談室が連携し、対学部等支援ユニットを置いたことである。各学部の体験を共有し、対応についての構築を進め、教職員も含めて支援していくことを目的としている。

### 4. 全学的な対応システムの意義と進め方

各学部における学生の心の問題に、全学的に対応する事のメリットは、学部を支援するだけでなく第三者

の視点が得られることだと思われる。学生個人の問題に対応しているようで、突き詰めていくと、各学部特有の課題や、各学部に通ずる課題が浮き彫りになると考える。ここで課題を抽出・分析し、課題解決に向けて提言する又は啓蒙活動をすることで、大学全体の課題への取り組みとなり、教員が授業準備や研究時間を得る管理システムを整えていく事に繋がることを期待している。

改革の柱は支援チームになると思うが、学生対応に長けている学生相談室や支援チームからすると、窓口である学部の対応にいらだつことがあるかもしれない。「障害のある学生に対する修学支援の組織体制」は、学部の活動を支援する組織なので、学部があるべき姿を描き、あるべき姿にむかって動くのを支援する組織であり、学部の力を見つけて支援する組織であることが必要だと考える。そのためには、大学には多様な文化が存在しており、多様な価値観が存在することを受け入れることが必要である。協働するには、自分の価値観と先入観を把握し、異質性の良さと潜在性を見いだす事が必要であり、各学部や支援チームが自ら動き、顔の見える関係を作ることが重要になる。さらに、大学全体で現状理解を進めるには、わかりやすく伝える工夫が必要であり、数量データよりも代表事象を提示する方が具体的に伝わりやすく、課題共有への認識が進みやすいと考える。

本学における「障害のある学生に対する修学支援の組織体制」は、今後、進めて行く上で様々な課題が出てくると思うが、実践しながら課題を解決していくことにしている。

## おわりに

執筆依頼を受けて何を書いたら良いか悩んだが、今一番気がかりなことを題材にした。各大学の学生支援のあり方は様々だと思うが、何かの資料になれば幸いである。

ところで、最初に述べた認証評価に対する「評価疲れ」だが、この対応に向けて高橋会長は、大学基準協会が「効果的な伴奏者」になることを提言している。これは、認証評価を受けて良かったと思える成果に向う伴奏者のことだと考える。高橋会長は、ステークホルダーに活用されることで、大学の質の充実化に貢献しているという手応えを例にあげている。著者は、今回のテーマから成果に向けた連携のあり方が見えてきたので、認証評価における評価者と受審大学との相互交流をあげたいと思う。著者が新人評価者として大学基準協会の評価に加わった頃に、主査から最初に言われたことは、受審大学にダメだしするのではなく、そうならないために一緒に考える姿勢で臨むという事であった。そのため、基準評価に基づいて受審大学が表現できていないことを表現できるよう資料を掘り起こし、確認する発言を心がけたように思う。意見交換を通し、改善や改革の方向性が見えてくると、両者から充実していたとの感想が出ていた。大学基準協会は、「会員の自主的努力と相互援助によってわが国における大学の質的向上を図る」ことを目的としている。本来のあり方に向けて、相互交流となる意見交換のあり方の検討をお願いしたい。